

# 『青山社会科学紀要』30巻の発刊に寄せて

経営学研究科長 長谷川 信

青山学院大学大学院『青山社会科学紀要』は1973年に第1号が発刊され、今回30巻の刊行を見ることが出来ました。第1号の発刊に際して、当時の小林孝輔法学部長は「大学院生および研究生のための独自の研究発表誌の刊行は、関係者におけるかねてからの念願であった。いまここに、はれて宿願かない第1号の発刊をみる。いささかながしい道程であった。そのゆえに、この努力の一端を担った者として飲びに堪えない。」と述べられている。大学院紀要の刊行がかならずしも容易ではなかったことを窺うことが出来ます。

当時、法学研究科、経済学研究科、経営学研究科という三研究科が協同してひとつの紀要を編集するという方式が選択され、そして今回『青山社会科学紀要』が30巻の刊行をみるということは、先学たちの努力が一定の成果を収めてきたことを示しています。研究発表の場が十分に確保されているとはいえない大学院生にとって、『青山社会科学紀要』がつくられた意義は大きく、その後も大きな役割を果たしてきたといえましょう。

さらに、今年度からは、大学院生を含めた編集体制がスタートしようとしています。これは、大学院生が紀要の編集を主体的に行って、名実ともに大学院生の紀要としての内容が整うという意味で、重要なことがらと考えられます。

『青山社会科学紀要』の発行はこれまで多くの方々のご協力によって支えられ、大学院生の研究者として、そして社会人としての道を開く役割を果たしてきました。みなさまのご協力に感謝するとともに、今後の『青山社会科学紀要』のいっそうの発展を祈念いたします。

のお力添えがありました。これから「紀要」に稿を寄せようとする人は、こうした方々への感謝の念をもち、自ら成果の公表自体にも応分の力を尽くすという気構えで「紀要」にかかわってほしいと思います。

上記した「青山社会科学紀要」の「刊行の意義」は今後とも変わることがありません。本紀要が、研究心旺盛な若い知性の真摯な努力によって、ますます内容充実し、発展してほしいと衷心よりお祈りいたします。